



特別  
~13  
4199





田中實印

昭和五年二月三日  
雲英末雄氏贈

長元 下 田中町 地 公 給 夜 夜 中 角

長元 下 田中町 地 公 給 夜 夜 中 角



山文庫

中元角

山

山



田中呂後給

には法師の心には多くはなほ下り予が好む言に  
あやまらぬや難信のありしをいふ外に下りて  
きかふにせむくあつたは家名のなくんといふ  
は右田の題号はかきおちるを俗にわ  
くきや名はくきりりんまらふ

元禄八し亥年

初ま吉辰

春



長品赤門関

叙

此の春よりみれば秋去ては冬も終  
なすは時雨月のごとくめけ俗にわ  
をなすきいかいみりて松壽の西の  
まきりあふ今ハの時ごりぬき秋  
きりしはしりし中よりまのりんは  
らえて春林何れ果ふのはる題号ハ

かみ月れ下雲の朝いとたれしるく  
愛あつよのたふわくおけつ不憂のあ  
ろくも

元禄八亥竜集



正月のくくり筆下

浪花俳諧堂西鶴菴

周水撮

西鶴俗はやく書一

目録

一 過く然親の憂

あき酒

口ふらん酒のれ  
魚ゆらるるのち  
大いひき物な  
後ゆきとやう  
清のほさふら痛

二 上戸丸裸

いづれ

今の世のうづの徳  
去りしんたさうさ  
よし清なるの甲さ  
見りしうづわいさ  
不即ありのいさ





山城 城  
德 源 保 城 城







酒は飲 虚ろなけしむにやうくかけらうくは負て死  
色は白くいざ先へゆり九太史と憐まて一と花  
わたり乃 泳者兼用形一乃 花衣并 緩の衣は赤  
火をくまれ 漣を染けて人死り 髪よかけ 次申 奴子  
出立乃 ともさゆく 万事とともく 事はいま 誤  
池をくま 板の末乃 法よかたけ 一ふ九太史の吸  
筒と乃 舟と一と 壺の色こりの色 忘れ 養子  
かひくを 来りされ 九太史 一と 板を 舐  
立 壺 時 杯 各 園より 寄く 御紙 けね 柱 造 家と 云く  
まわか 下 け ぬ 色 不 秘 的 なる 異 地 一と 飲 酒 戒 せ  
し 乃 更 一と 吸 筒 一 何 事 下 ぬ け とも 九 太 史







橙 橙 橙 椀 椀 椀



西 嘉 俗 後 川

飲み又狩湯く都末魔の昔より堪えて終全  
まの活くとまきく心も小あしこれの安楽しそ居  
とたし音もたきくど船より次目今百とま  
すじもといはねおなまこ飲と終入けし  
煮ららるる一日小幾度と子殺せろくはま  
鬼を視紙抄へかあしと秋と恨むゆめれ海が  
ぬる酒乃一滴の華七十粒より出ると酒持音ふ  
吾れ業と終の音よ赤より赤くはくまを酔  
相のありと子方持むおひのしと終りるに  
まこはね後乃男のそれいりかこあまをい  
くはそ赤くま形し橋次庭泳と今よりゆりて終

回 中 公 文 文

孫の合点氣くまゆしくま温燻がぬ物也後の世ま酒  
いあいかとあふれど奥よりこれの傍のゆりりの虎貞を  
入見れ米とうりふ窓壁のちも乃鐘撞く万系をい  
らぬ山丘ぞる池乃大地と飲らるるまけぬ中  
しるた方よりかす付られ袖袂の注のひ上下入み  
てゆり足樹とく池池をきゆりくこれのあをぬ  
えんじとあまは横松とく来まるとあをぬれま  
あけられ紫竹村乃壺乃流れよまに色あの水ち  
流びぬる腰より下の腔丸付く黒魚よあへら  
まは産板よ載くゆりぬんぬ後の世のあはれ  
まこわく同あまは地鉄のらる

山城屋  
熊右

甲  
九郎左衛門

お  
貞屋

長  
三郎

長  
四郎

宗  
右衛門

右  
衛門

四 ねをりくちがひも酒樽

夏と元世傳傳の海鏡お乃漆の舟も酒樽  
一川うらぬのあゝと情多しおくれりおた疎屋乃  
木三右衛門の換は是か枝橋成座に打ちて道状  
の御よりとつひに推し船人おはゆりぬ事これと  
見く大坂乃同座よりを物あるべしお漢りてを  
和發志よりと枝前座乃御りといれ徳園乃  
家と傳述万事乃おたはる程お色おた男あり  
何程乃酒あせと某色各酒成造る宿へ酒樽乃  
善候よりとこのおた是は橋へ天渡る乃主人の  
大指れ細漢よりとおたりおれがる物ましくおたは

長切屋  
伊藤屋  
右衛門  
宗右衛門  
右衛門

長切屋  
伊藤屋  
右衛門  
宗右衛門  
右衛門

おとけいへと大英のしつて御成お成が代  
門口より袴着衣とよと此氏教り居る  
へおたりとよと此氏教り居る  
おか橋より私かお今もこれお人の力  
おされてかかかぬ背ありおる乃油子  
之へ橋より六月七日の骨おおたわら  
おたはる先氣付醫志針之灸おとさ油くお  
おたはるおの鬼角の是と油命油死候と  
是へと油乃おの世も色ぬくと油の酒樽  
あゝと油乃おの世も色ぬくと油の酒樽  
あゝと油乃おの世も色ぬくと油の酒樽





通  
方  
心



西郷  
傳次郎

大馬場

さうり乃わく後つれ死く己人の目よまきふ級  
よ紅裏付と女師とあふれし級小麻子の忠  
帯け美男とや上方もあふれやいま一  
あく親と油しんかか母は文小梅とあ  
妻色あほ娘とあ。このもあふれ  
よし今もあふれ。洗もあふれ。未だあふれ  
ありたとPされ。あふれ。あふれ。あふれ  
かあ後直娘。あふれ。あふれ。あふれ  
を後大坂へ付くのが。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
Pにあふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ

山吐

日乃市出程  
夜を越え  
山吐  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ

あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ  
あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ。あふれ

ヒカミホツキ  
ハナ

アタラシ  
ヨヤ  
今ナ

山崎之衆